

## 美容技術を用いた「結ぶ」の表現 (2) ～ 髪 ～

### The Expression “MUSUBU(Tie)” with Beauty Techniques (2) - Kami(hair) -

富田 知子<sup>1)</sup>

#### 抄録

前稿で記したように和装の技術としての「結ぶ」をテーマの青木との共同作品展において、ここでは富田の「髪」の表現として制作した作品について述べる。現代の髪型においても束ねる、結ぶ技術は使われているが、ここでは「和装」・「結ぶ」を意識し、結髪技術「日本髪」をベースにした作品制作とした。髪型を作る上でその土台となる人頭が必要となる。髪型は顔形と深く関わるため、今回はその土台となる人形から制作をおこなった。人形は高さ約 10cm 程度の大きさで制作した。

キーワード：和装 結ぶ 結髪 日本髪 人形

#### I. 「結」髪型について

毛髪の形状やヘアスタイルは人のアイデンティティをも示すことが有る。例えば、その人の存在の証明としてのアイデンティティは、古代ローマの胸像の「ルキウス・カエサル」（紀元前 1 世紀末）の胸像にみられる「釘抜き形」と「ツバメの尾形」の 3 つの房髪のある規則的短髪は正式な養子縁組の正当性を理念的に表すものとして作られている<sup>1)</sup>。また日本人らしさという点からみると、髪は一般に、黒く、直毛、固い、というイメージであろう。毛髪は科学的にみて構造上遺伝的な側面もイメージの 1 つになっている例で、毛髪の色を決定するメラニン色素の形状などは人種とも関係してくる<sup>2)</sup>。生活環境やライフスタイルの変化にともなって、日本人の髪質も変化しつつあるが、諸外国では黒髪が日本のイメージを代表するものと受け取られているようである。その硬質な黒髪は、纏められることで漆器のような質感の面を作り出す漆器は Japan の典型的なイメージを喚起することになる。

今回の展覧会のモチーフである「和」の表現には、この黒髪が束ねられて作り出される漆黒の面が必要で

ある。漆黒からくるイメージに加え形の「和」として、髪型は日本髪をイメージして作成した黒い固い面を持つ日本髪、これはまさしくピン等で止めてつくるのではなく、ほぼ「結ぶ」事で行われている。髪は「結ぶ」のである。今回の作品すべて、結ぶことを重視し髪型を制作した。

今回の作品で、基本の行程は下記の 6 工程であるが、髪型によっては行程が少ないものもある。①根を結ぶ（頭部中心の軸となる毛束）。②髷（後頭部襟足の毛束）を上げ結ぶ。③鬢（左右頭部横の毛束）を上げ結ぶ。④前髪を上げ結ぶ。⑤髷を造り結ぶ。⑥飾りを挿す。

それぞれの髪型は、江戸時代前期より明治初期まで結われていたものを元にしてその中からテーマに合わせ選択し、変形させた。江戸時代は非常に多くの日本髪が考案され、江戸時代文化の成熟度が感じられる。

#### II. 作品のコンセプト

「和」を表現する作品群は、日本の自然に小テーマを求めた。四季のテーマとして春は「菜の花」, 「さく

1) Tomoko TOMITA  
山野美容芸術短期大学

ら」、夏は「あゆ」、「はす」、秋は「銀杏」、冬は「椿」、「雪」、「つる」を選び、それぞれをイメージする髪型をデザインし 8 作品を制作した。飾りは、髪型のイメージを決定付けるために不可欠なものである。黒髪 1 色でできた髪型に、季節を感じさせる色を加えることができる。実際に現在も京都舞妓等が使用する飾りには、季節感を表現するものが多い。髪型は抽象的な（例えば；川の流れるは直線的な毛の流れで表現する等）表現になるため、飾りでは、色のみならず、形も小テーマにあるものを（例えば「桜」など）具体的な形を用いた分かりやすい表現とした。

胴体部分では、帯の上からの人形のため、着物は着物の襟を思わせる形の胴体を制作し、着色した。それぞれのテーマに合わせた図柄を描く、または、樹脂粘土で制作した飾りを付け、頭部のテーマと関連付けた。胴のベースは黒に統一し、胴体部分が主張しすぎることを避け、帯のボリュームが無いことで頭部より小さく感じられる胴体に重みをもたせた(図 1)。



図 1. 人形部位解説

前稿でも記したが、作品の大きさは 10cm 前後のものとした。青木の帯の作品も同様に 10cm で制作され、帯と髪が展示された場所にて同時に目に入り、それぞれが響き合う可能性も考えた。10cm 前後の大きさは通常のモデルウィッグを使用することができず、

頭部胴体全てオリジナルで制作することとした。市販されているモデルウィッグは標準的な卵形の輪郭で作られている。テーマに合わせたヘアデザインを考えると、顔形から生まれる顔のイメージも重要であると考えたためである。

### III. 作品素材

人形素材はすべて樹脂粘土を用いた。頭部を造り、漆（白）または胡粉（胡粉：日本画に使用されるホタテ貝の微粉末からつくられる絵の具）にて肌を表現した。漆の肌は光、強いイメージとなり、胡粉の肌は、優しいイメージを感じさせる。

頭部には溝を造り人毛の叢毛を差し込み植毛した。人毛にはキューティクルが含まれている。作品の制作の過程で最も問題になったのはこのキューティクルであった。作品の頭部は縮小されているがキューティクルは同じように縮小されていない。キューティクルは、鱗状であり、髪を曲げる際に無理なく曲げることに役立っている。しかしながら今回の作品のような小さいカーブを作ろうとする時、自然に生じる曲線では期待する形状にはならないことが分かった。人頭においても、日本髪を作る際にはヘアアイロンで「ふかしコテ」という方法を用いることがある。今回の作品で、必要なカーブの表現をするため、直径の小さいヘアアイロンを使用し、制作した。

飾りでは、樹脂粘土を使用し制作した。その他、手柄（絞り鹿の子）、丈長（紙でできた根飾り）は通常美容で使用するものを小さく切って使用した。

### IV. 作品の写真及び説明

作品の写真は全て文末に付け、サイズ、材料、制作意図について解説する。サイズは全て高さ×幅×奥行きを単位ミリで表示した。ここで使用した写真は、個体の説明のため、会場では無く、個体で撮影したものを使用している。髪型の髷名称解説及び歴史的解説に関しては脚注にて明記する<sup>3)</sup>。



1) つる 170×150×150 (単位 mm)

人形：樹脂粘土、人毛、漆、紅白丈長

丸髷<sup>1</sup>を元にした作品。鬢を張り出し、根飾りの丈長を広げるように長くすることで、鶴が飛び立つ姿を表現した。人形の顔は漆で仕上げ艶をもたせる事で、毛髪のもつ重厚さに呼応すると考えた。



2) さくら 120×80×150 (単位 mm)

人形：樹脂粘土、人毛、胡粉、銅針金

島田髷<sup>2</sup>を元にした作品。凛とした華やかさを意識し鬢はやや鋭角に、髷はゴールデンポイントを支点にその延長線を進むようにあげ勢いのある桜の存在感を表現した。人形の顔は胡粉にて柔らかい質感に仕上げた。



3) 菜の花 150×150×150 (単位 mm)

人形：樹脂粘土、人毛、胡粉、手柄

銀杏返し<sup>3</sup>、唐人髷<sup>4</sup>、桃割れ<sup>5</sup>などの蝶を思わせる髷を元にした作品。ゆったりと下げた輪髷が蝶を思わせ、春先の蝶の舞う菜の花を表現した。人形の顔は胡粉にて仕上げた。

<sup>1</sup> 丸髷：髷の部分丸い江戸時代の髪型。

<sup>2</sup> 島田髷：髷の毛先を下へ折り曲げた江戸時代の髪型。

<sup>3</sup> 銀杏返し：髷が左右に分かれた江戸時代の髪型。

<sup>4</sup> 唐人髷：銀杏返しの変形。

<sup>5</sup> 桃割れ：髷を二つに分けて丸い輪にした明治時代の若い女性の髪型。



4) はす 120×80×120 (単位 mm)

人形：樹脂粘土、人毛、漆、元結

根結い垂髪<sup>6</sup>を元にした作品。丸く広がるフロントと、丸く纏められた鬘の形をつなげることで丸い蓮の葉を表現した。人形の顔は漆にて仕上げた。



6) いちょう 90×200×100 (単位 mm)

人形：樹脂粘土、人毛、胡粉

唐輪鬘を元にした作品。はらはらと散る銀杏の葉を、銀杏形の鬘と崩れるように広がる前髪で表現した。人形の顔は、胡粉にて仕上げた。



5) あゆ 100×180×100 (単位 mm)

人形：樹脂粘土、人毛、胡粉

唐輪鬘<sup>7</sup>を元にした作品。勢い良く流れる清流を固く纏め捻りながら迫り上がり、直線的に下る前髪で表現した。人形の顔は、胡粉にて仕上げた。



7) ゆき 100×170×120 (単位 mm)

人形：樹脂粘土、人毛、胡粉、紅白水引、ガラスビーズ

<sup>6</sup> 根結い垂髪：根元を結び垂らした安土桃山時代の髪型。

<sup>7</sup> 唐輪鬘：髪を後頭部に集め、高く輪を1つに纏めた安土桃山時代の髪型。

根結い垂髪と灯籠鬢<sup>8</sup>を元にした作品。フロントの髪を薄く広げ、光を通すことで、雪光表現した。人形の顔は、胡粉にて仕上げた。



#### 8) つばき 100×120×100 (単位 mm)

人形：樹脂粘土、人毛、漆

束髪を元にした作品。厚く光沢のある葉、その折り重なるように茂る葉の中で、重厚で華やかさをもつ椿を、捻り纏めた髪で表現した。人形の顔は漆にて仕上げた。

### V. 制作を終えて

作品を製作していた段階では、人形頭部のみで、完結した作品になると考えていた。展示をしたことで、青木の作品と並び、前稿でのべたように目指していた帯から髪へ、髪から帯への「ひとつながり」イメージが完成したことを改めて感じた。美容表現は人体をもって表現されるものであるということから考えても、本学の建学の精神である「美道五大原則」髪、顔、装い、健康美、精神美の表現がここに感じられる。髪型のもつボリュームと形を受ける帯型は、同じ空間に置かれ調和をもたらしたと考えられる。日本の土壌の中で生み出された技術、歴史的な記憶がもたらす調和で

もあろう。精神美、健康美は人体を美容は部分でもむろん美しいものを表現する力をもつ。しかしながら、文化や時代の表現としてそのものをみるとき、全体のバランスがそれを表現することが分かる。社会の進化により、物理的な可能性の広がりや、生活スタイルの必然性から求められる美もあるが、美容は人の心に寄り添い、その形をデザインしているのであろう。今回の表現は現代の日常の表現とは離れているものである。日常から離れた美容表現は、美容師のアトリエデザインという個人的な表現方法になる。ここには、通常美容室で存在する客から求められる制約は存在しない。美容師がこのような制作活動を行うことは美容技術の開発にもつながると考えられる。今後も制作方法を模索し、美容芸術としての表現を広げていきたいと考えている。

### 文献

- 1) ジェンドメニコ・スピノラ：ローマ皇帝と時代の流行，国立西洋美術館古代ローマ彫刻展カタログ（高梨光正 学術協力 日向太郎 NHK プロモーション），p.34，2004.3
- 2) 本田光芳監修：新ヘア・サイエンス，社団法人日本毛髪科学協会，2009.3
- 3) 公益社団法人日本理美容教育センター：「美容文化論」，2015.4

<sup>8</sup> 灯籠鬢：鬢の毛筋が透けて向こう側が見える江戸時代の髪型。